

IACR (International Association of Cancer Registry ; 国際癌登録学会) の紹介並びに入会の勧め

早田 みどり

放射線影響研究所 疫学部

IACR は、世界中のがん登録、殊に地域がん登録の普及・育成を目指して 1966 年に設立されました。がん登録は、がんの発生パターンや年次推移に関するデータを提供することにより、また、異なる疫学研究にデータを提供することによりがんの原因究明に重要な役割を果たしています。対がん戦略を立て、それをモニタリングする為の必要不可欠のツールでもあります。がん症例を正確に登録し、統計データの信頼性や比較妥当性を高める為に、各がん登録は標準化された登録作業を遵守する必要があります。この学会は、がん登録に関する国際間の情報交換を可能とし、登録の精度を高め、登録間のデータ比較を可能とすべく、WHO の下部組織である IARC (International Agency for Research on Cancer, 国際癌研究機関) の協力を得て、様々な活動を行っています。主たる活動は、年 1 回の学術集会開催と CI 5 (Cancer Incidence in Five Continents) に代表される癌に関する様々な出版物の刊行に関与することです。この学会は非政府組織ですが、1979 年 1 月から WHO の公的な支援を受けています。

地域におけるがん登録や死亡調査の開発・運用に興味を持つ会員で構成されており、毎年、5 大陸を 1 循環する形で学会が開催されています。1984 年には福岡でこの会が開かれましたが、その時参加された先生も居らっしゃるのではないのでしょうか。筆者は 1998 年のアトランタ大会から毎年参加していますが、8 年の間に世界のあちこちを訪れることができました。この会の会員ならではの特典の一つではないかと密かに思っています。規約に「地域におけるがん罹患あるいはがん治療の結果に関する情報の収集・解析に関与する組織会員を歓迎する」と謳われていますが、会員には以下の 4 種類があり、個人会員も認められています。

- Voting Member・・・理事を選ぶ選挙権を持つ会員
- Associate or Corporate Member・・・選挙権を持たない会員
- Honorary Member・・・地域におけるがん登録の開発あるいはがん研究に顕著な貢献をした人物に与えられる
- Individual Member・・・選挙権を持たない個人会員

理事長、事務局長、副事務局長と地域代表で構成される理事会は、この学会における様々な決定権を有していますが、これら理事は学会規約に基づき選挙によって選出され、任期は 4 年です。理事会はその時々状況により地域の再編成をすることになってはいますが、現在は以下の 6 地域に分かれており、夫々の地域を代表すべく理事の数が決められています。

アフリカ(1)、ヨーロッパ(2)、北アメリカ(2)、中央及び南アメリカ(1)、アジア(2)、オセアニア(1)

地域代表は地域世話係として、がん登録の継続的な資料を提供するほか、情報交換やプロジェクトの組織化を促進しなければならないとされています。日本からはこれまで、花井彩先生、馬淵清彦先生が理事を務めてこられました。現在は、大島明先生(4 年目)と筆者(2 年目)が務めています。なお、昨年より、CI 5 で皆様よくご存知の Dr. Parkin が理事長を務めておられます。

表 1 をご覧下さい。現在 IACR のホームページ (<http://www.iacr.com.fr>) 上で公開されている会員数は全体で 478 ですが、日本からは 5 人の個人会員を含む 16 団体が参加しています。藤本伊三郎先生と花井彩先生は癌登録に対する功績により名誉会員となっております。残念なことに、会員の特典である CI 5 へのデータ掲載は 6 登録に過ぎず、しかも、その殆どが*付きの掲載となっています。アジア全体の状況よりも悲惨といわざるを得ません。翻って北アメリカ、オセアニアを見ると、登録会員が多いこともさることながら、会員の 7~8 割の登録が*無しで CI 5 にデータを掲載しています。

表 1. 現在の地域毎の会員数並びに CI 5 Vol. VIII に
おけるデータ掲載登録数

	Voting	Associate	Individual	Honorary	Total	CI 5 掲載数
日本	10	1	3	2	16	6 (*5)
アジア	55	18	21	6	100	43 (*37)
ヨーロッパ	105	58	17	12	192	88 (*24)
アフリカ	7	37	5	0	49	6 (*6)
北アメリカ	39	12	11	4	66	26
南アメリカ	18	29	6	0	53	11 (*10)
オセアニア	13	2	2	1	18	14
全体	237	156	62	23	478	188 (*77)

() 内は、データを読む際、精度が低いなどの理由で注意が必要な登録に付けられる*マーク付き

欧米の癌登録では、国を超えたネットワーク作りがかなり進んでいます。自ずと、疫学研究の規模も大きなものとなります。アジアでもそのような動きが求められますが、まずはアジア諸国の足を引っ張ることのない様に、日本の癌登録の精度を上げる必要があります。

この記事を読んでくださった JACR の会員の皆様、この機会に、是非 IACR の会員になりましょう。そして、年 1 回の学会に参加し日本の現状を知らせるとともに、世界の現状を学びましょう。日本の標準化にも拍車がかかると思われます。また、日本各地のデータを CI 5 に載せようではありませんか。できれば*無しで。入会を希望される登録室の関係者の方は、IACR のホームページ (<http://www.iacr.com.fr>) をご覧頂くか、筆者までご連絡いただければ嬉しく存じます。

最後に、次回の IACR 学会のご案内を簡単にさせていただきます。2006 年 11 月 8 - 10 の 3 日間、ブラジルのゴイアニア (Goiania) という所で開催されます。サンパウロから北北西に 929Km のこの都市は、古いきれいな街です。日系人が多く住み、比較的治安も安定していると聞きました。取り上げられる内容は、職業と癌(アスベストなど)、癌の地理疫学、放射線と癌、食事と癌、発展途上国における癌の罹患動向、身体活動と癌と、多岐に亘っており、演題が出し易いのではないのでしょうか。多くの方のご参加を期待しております。

「第 14 回地域がん登録全国協議会

総会研究会報告」

祖父江 友孝
国立がんセンターがん予防・検診研究センター
情報研究部

本年 9 月 2・3 両日にかけて、国立がんセンターにおいて第 14 回地域がん登録全国協議会総会研究会ならびに実務者研修会をお世話させていただきました。お陰をもちまして、総会研究会には 250 名、実務者研修会には 176 名の方々の参加をたまわりました。会場が 200 名で満席でしたので、多くの方々にかなり窮屈な思いをおかけすることになりました。この場を借りてお詫び申し上げます。

国立がんセンターは、地域がん登録実務を行っていない団体としては初めて 2 年前に本全国協議会に加えていただいた新参加者ですが、いきなり総会研究会を担当させていただくことになりました。地域がん登録関係者の方々の、国立がんセンターに対する期待の大きさを強く感じるところであり、その期待を裏切らないように、今後ともまじめに着実に取り組んでいきたいと思っております。

さて、今回の総会研究会は、従来の総会研究会とはやや趣を異にしておりました。というのが、国立がんセンターでは地域がん登録の実務を担当しておりませんし、開催地である東京都も残念ながら地域がん登録を実施するには至っておりません。従って、それまでの実績に基づいて地域の実情を紹介するというプログラムを設定することは不可能でした。それに代わって、国際がん登録学会理事長の Max Parkin 先生と、韓国国立がんセンターの辛海林先生をお招きして、諸外国の地域がん登録の実情を学ぶという企画をいたしました。講演は英語で行なわれたので、やや理解しづらい点があったかと思いますが、Parkin 先生の講演の中で日本の登録精度が先進国の中では最も低いと指摘されたこと、また、辛先生の講演で、韓国においては国レベルの地域がん登録が高い精度を持って完成しつつあることが報告されたことは、聴衆として参加されてい

た方々に強いメッセージとして伝わったものと思います。

午後は、大島理事長の教育講演として「地域がん登録における機密保持ガイドライン」の話をいただき、シンポジウムとしては「院内がん登録、地域がん登録の連携」と題として、津熊先生(大阪府立成人病センター)、西野先生(宮城県立がんセンター)、西本先生(大津赤十字病院)、猿木先生(群馬県立がんセンター)にご発表いただきました。その他、通常のポスターによる発表に加えて、企業ブースのコーナーを設け、地域がん登録・院内がん登録にかかわるシステム紹介の場を設けました。

また、明るく日の実務者研修会では、第 3 次対がん祖父江班での取り組みを紹介する内容として、「全国がん罹患集計の進捗状況」を丸亀先生に、「地域がん登録の標準化」にかかわる話題を、味木先生(大阪府立成人病センター調査部)、柴田先生(山形県立がん・生活習慣病センター)、片山先生(放射線影響研究所)にお願いしました。前日のシンポジウムと合わせて司会を担当してもらった金子先生は、10 月 1 日をもって長崎大熱帯医学研究所の教授に栄転され、これが地域がん登録にかかわる仕上げの仕事となりました。

実は、この直後(9/13 - 15)にウガンダで行われた国際がん登録学会でも、Parkin 先生、辛先生にお会いし、そこでも韓国の躍進ぶりに圧倒されっぱなしでした。日本のおかれた現状を直視し、遅れを取り戻すために地域がん登録関係者が一丸となって協力し合う時期にあることを再認識させられました。

編集後記

巻頭言(大島先生)の地域がん登録は「癌対策の羅針盤」と猿木先生の「がん登録元年」という言葉、また、丸山先生から原稿を頂戴し、がん登録に法律家の視点がかかわったことにも勇気付けられました。三上先生はアスベスト問題について述べる中で、兵庫県がん登録に言及されました。我々以上に、石田輝子先生は歯がゆい思いをなさったことと思います。津熊先生からは、大阪府がん登録室における様々な取り組みを紹介していただき、大変勉強になりました。田中先生と筆者二人で、IACR の宣伝を致しましたが、これを機に、会員が増えることを期待しています。祖父江先生が書かれたように、日本のおかれた現状を直視し、地域がん登録関係者が一丸となって協力し合う時期だと思っております。今年、山形で開かれる総会研究会を是非成功させましょう。(M.S.)

この季節、雪道での転倒で負傷した方のニュースを多く聞きますが、外国では自宅前の除雪が不十分で通行人が転倒、負傷した場合、賠償の責任を負わせる形で除雪を促す例があると聞き、その是非はともかく日本でも何らかの予防への取り組みが必要では感じました。本ニュースレターの中で、三上先生から戦後日本の社会に「予防」の考え方がついに根付かなかったとご指摘がありましたが、地域がん登録の必要性が国民に理解されるためには、今からでも「予防」の重要性の認識を浸透させる努力が不可欠であると感じます。(Y.N.)